

批評

津田左右吉氏著

『文學に現はれたる我が國民思想の研究（貴族文學の時代）』を讀む

文學士 西田直二郎

一

本書は著者が我國文學の上に現はれてゐる國民思想の種々の相と其變遷及び發達の徑路とを研究せんと企てたものであつて、著者は國文學の時代を三大時期に分ち、先づ推古朝前後を國文學の始まりと見做し、此時代から鎌倉のはじめ新古今集

の撰ばれた頃まで凡そ六百年間を貴族文學の時代とし、次に江戸時代初期までの約四百五十年を武士文學の時代、其後明治十年代、未だ新文學の現はれない頃までの二百五十年を平民文學の時代とするにて、本書は其第一期の「貴族文學の時代」に當たるもので、尙今後刊行せらるべき武士文學の時代及び、平民文學の時代と相俟ちて著者の國民思想に關する見解は一貫するものである。

（此點から言はゞ、此の一卷のみによつて著者の見解を評することは其當を得たるものではないかも知れないが、本書は特色のある著作であるが爲めに、取りあへず獨立に此書に對して、所感を披陳する次第である。）

而して本書、「貴族文學の時代」の内容は、先づ序説としては、上代の國民生活の概要と、文學の萌芽が何時の代にあつたか如何なる性質のもの

のであつたかを述べ、次に第一編を貴族文學、發達時代とし、推古朝前後から天長承和頃迄の間を採り、其間の文化の大勢、文學の概觀を述べ、更に支那思想及び佛教思想、戀愛觀、自然觀、國家との觀念、輕快の趣味等の章を立て、夫れ／＼に關する思想を論じてゐる。次の第二編は、貴族文學の成熟時代とし、貞觀前後から萬壽頃までを

之れに充て、前編と同じく此時代の文化の大勢、文學の概觀、並に戀愛觀、權勢觀、佛教及び儒學思想、智的傾向、悲哀の空氣等の章があり、第三編は貴族文學の沈滯時代として、長元頃から承久頃までを以てし、同じく文化の大勢と、文學の概觀があり、其の外に舊題材と新傾向、厭世思想、

神秘的及び道德的傾向、武士の思想等の章を立てて分ち論じてゐるのである。是等の編章の目を一見しても、本書が其内に興味多き問題を捉らへ、又在來の國文學の研究とは選を異にしたものであ

ることを推知することが出来る。

本書を通觀するに、貴族文學が如何なる特異相を有してゐるか、又この貴族文學が如何なる事情の下に發生し、興隆し、又衰頹したかと云ふ全篇の要旨も先づよく通つてゐる。而して又各編章の間を概觀して行くに、記事の最も精細であるのは各時代の文學其物に關する議論である。

此の點から、本書は一の國文學史だと言ふことが出来る。少くとも甚だ近い關係に立つてゐるものであつて、著者も此の事は其の序の内に言うて居るところである。然らば在來の文學史と如何なる風の交渉があるか、本書研究の特色を先づ此方面から述べて見やう。

二

日本文學の歴史的研究は、其個々の作品、作者に關しても、又一般的考察に於ても近時著しい進歩をなした。故藤岡博士の「國文學全史、平安朝

篇」尾上八郎氏の「國文學新史」、又芳賀博士の「國民性十論」などは、同じく國文學者の手になり、大体同じく國文學を其對象とした研究であるが、夫れ／＼異つた研究方法と態度とを代表してゐるやうに思はれる。藤岡博士の平安朝篇は、此時代の文學研究の權威として、或る時期の間、他人の研究を抑へたほどの良著であつて、細部に於ては固より多少の議論を残したけれども先づ此時代の作者作品に關する研究を一應完成したとさへ見られたものである。而して其態度の一面に綿密精緻な考證家たると共に、一面に於ては文學を藝術的作品として見て行き、之れを批評し、且つ之れを樂むと云ふ、言はゞ藝術翫賞家とも言ふべきところがあるに現はれてゐた。

又文學史の脉系を作者の列傳、作品の年代記的鹽列から離し時代の思潮や思想の源泉等に注意したもので稍、特色のあるものには鈴木暢幸氏の「日

本文學史論」、又故藤岡博士の「國文學史講話」などがあるが、此時代思潮を最も強く説いたのは尾上氏の「日本文學新史」で其功績は時代の文學に共通にして其中核をなしてゐる大精神を求め、是から國民思想生活の大道を畫かんとしたことである。時代文學の奥底に横つてゐる勢力を抽き出し、其時代文學の傾向を考へるところは、史學に於ける觀念論者の態度のやうなところのあるものである。芳賀博士の「國民性十論」は新史より以前に出たものであるが、文學を主として見た國民性の發露を討つねたもので矢張歴史的の研究として見るべきものであると考へる。

さてかやうに過去の文學史方面の研究を回顧すると、本書「文學に現はれたる國民思想の研究、貴族文學の時代」の、文學の取扱ひ方に於ける特色と、著者の之れに對する研究態度とを明らかに了解することが出来るのである。

著者が從來の文學史研究の列傳的年代記的なるに不滿を感じた點は上述の日本文學新史と似てゐるし、又古代より平安朝末までをある一種の文學に總括した基礎觀念に於ても彼著と似通つた點もあり、其他細部々々に亘りて前掲述作の所説や態度と同異を認めるが、然も本書の文學の取扱ひ方に於て、彼等何れの書にも許すことの出来ない特色として明瞭に現はれてゐるものは、文學的作品と時代思想と社會狀態との間に因果の關係を最も巧に設定したことである。文學を藝術的作品として之れを嘆賞せんとする態度は此處に於て已になく、冷かに文學を以てたゞ人間精神の所産として見て行き、之れを作つた時代思想と其思想の持主である當代社會の體軀を解剖しやうとするのが本書著者の態度である。

前掲の「國文學全史、平安朝篇」や「日本文學新史」などにも文學と時代思潮、社會狀態との關係は

説いてゐるが、然し其れはたゞ一般的に、或は全体として其等の關係を認めてゐるか又は其概略を記すに過ぎない。然るに此書に於ては、最もこれを皇張したものである。其社會の實生活に凡ての思想發生の根據を取り、是れから文學の内容及び外形までも説明しやうとしたものである。其故文學の一作品に就ても其れに含まれる全体の思想は勿論其局部々々に存する片言隻句、又は形容修辭の裡に於ても其社會なり其時代と關係のつくものには見逃さず、一應の因果的説明を試みやうとした。尤も之れには其弊も伴つてゐるが、上述の著者の態度は本書の到る處に見ることの出来る特色であつて、又本書の價值も此處に求むべきであらうと考へる。

例へば、上代に於ける長歌の盛衰を考へるにも單に國語の聲調、構成上修辭上の關係からのみではなく、長歌と社會階級との關係を見、其作者も

其讀者も知識階級に限られることの推論をし、且又其時代が公衆的會合の無い時代であるから、かゝるものを歌ふ場合が少なく、儀式饗宴に朗吟せ

られないと云ふ社會事情の方からも觀察し、遂に是れが實生活と離れ、衰頹の因をなし、知識階級の遊戯としては、當代流行の漢詩賦に其地を譲らねばならぬやうになつたと説いてゐる。(二二六頁。三四〇―二四一)

三代集和歌の智巧的なるは、無事業の社會が人生を遊戯化したゝめだとし。(二四三頁。一六頁)或は又平安

朝中期の物語は結構の點に於て何れも不十分であるが當時の讀者は筋に重きを置かなかつたので、

其れは平安朝人の生活が其日々々の境遇に反應する外に何物もなかつたゝめに物語も亦まどまつた

筋を見ようとしなかつたのであるとし、江戸時代には、世人が因果應報と云ふ觀念が強く且つ榮枯

盛衰が複雑になつてきた社會の中に生活してゐた故、江戸文學には筋が主となつてゐる。(二八頁。三頁)

てゐるなど、是非の論は別として、著者の態度の一端が窺はれる。

三

次に本書の特色として擧ぐべきは、時代文化の記述である。時代の文化が其文學と如何ほどの交渉があるかと云ふことは最早多く説くを要せない。

著者が各篇の初に置いた「文化の大勢」は、各區劃せられた時代の文化の概觀であつて、其れは著者の目に映したところの時代文化の諸相を記したものである、是れはやがて引いて時代思潮の淵源として觀察しやうとする著者の心組であるらしい。

而して各篇の首に文化の大勢を記してあるのみでなく、尙各章の内に於ても好んで著者は文化史的觀察を試みんと務めて居つて、物語の發達を論じては是れと繪畫との間に横はる交渉を考へて物語が寫實的になつたと共に繪畫も寫實的になつたことは繪畫の愛翫者が其れに對しても物語に對

すると同様の心理を以て向つてゐたこと、日記や紀行が空想界に入り、物語となり小説となると同様に、繪畫もまたそれにつれて物語繪となつたと云ふやうな心理的の説明は著者の此方面に於ける着眼の秀拔なるを感じしむるのである、又第二編の權勢觀の内に於ても、人道的精神が人間の社會性から來る自然の人情として、又特殊の貴族的修練及び趣味から發達するを説き、是れが下層階級に及ばなかつたのは秕政と迷信の爲めとするよりも、自然な素朴な感情の頽廢したのにあるとしてゐる點なども一種の説明法として面白く、又稍

とび離れて、平安朝末期の和歌に於て俊成が唱へ出した幽玄體と云ふ一種の氣分本位又は餘情本位と云ふべき和歌の風牀が出現したのが是れ文化の沈滯期を表はすものだとして、此の幽玄牀と文化沈滯と言ふ懸け離れた二個の觀念の間を關係づけるため却つて苦しい説明に陥つてゐるのも、著者

の勞は多とせなければならぬ（四九七頁）。かやうに著者は各所に文化史的の敘述を怠らないが、この文化史的記述は、本書をして多大の新味と價值とを持ち來らしめたものと云はなければならぬ、而して文化史的記述に富む點に於て文化史研究者が此の書によつて、問題を提供せらるゝことが少くないであらう。

四

又次に、擧ぐべき特色は、論斷の自由なることゝ清新なることである。かゝる種類の研究はさきにも一言した如く其類の少ないもので、本書は先づ此の方面の研究に於ては新らしき試みと言ふことが出來、従つて其論斷の夫れ夫れに趣の異つたものが出て來るのであるが、然したゞかゝる大体の意味に於てではなく、各部分の議論が生々潑潑たるところに其の特色があると云ふのである。本書は兎に角太古から鎌倉初期に至るまでの時期に

就いて數百頁の議論を載せてゐるのであるが、其間には一として未だ世に知られない新史料を利用

してゐる。獨斷も亦多いけれども舊來の所説に拘泥しないのも一特色である。

したのではなく、又稀觀の珍籍を窺つて考説を立てたのではない、何處の頁にも古寫本の有難さを述ぶることなしに、だゞ坊間流布の鉛槧に憑つてこれだけの業績を擧げ而も讀者を倦まざらしむるものは、この議論が新奇にして又自由奔放なところによるのであつて、所在に獨創的な見解を頗る大膽に發表してゐる。又從來知れてゐる論結も、其れまでに導いて行く方法に新しい見解が這入つてゐる。例へば著者が伊勢物語を論ずる條を見ても、藤岡博士が業平の自作説を肯定し、芳賀博士が業平を主人公とする假構の歌物語とするに對し、本書著者は初めから小説として見、たゞ小説の幼稚な時代であるから、結構か單純で、主人公業平の自傳らしく見ねるのであるとしたなども、大体は芳賀博士の説から來ただらうが、兎に角かはつ

是れと共に本書は理論の透徹と、條理の整然を求めんとした著者の態度がよく表はれてゐて、議論としては一面的と思はる所があるけれども、理路の一貫してゐること、趣旨の含糊摸稜なところのないのは矢張長所として擧げなければならぬ其外、本書は時代から言へば、記事が國史の古代に局限せられてゐるけれども、事項によつては、夫れが日本の全歴史過程の上に如何なる地位を取つてゐるかといふ點などにも注意を怠らなかつた處々に明治や現代生活、泰西文化の批判を交へて古代生活の性質を明かにしやうとする態度も結構であるし、尙ほ古代思潮が遙かなる後の時代に及ぼした影響なども説いてゐる。我が國特有の優美なる花鳥風月の趣味が萬葉に於て十分發揮せられ

て、それより後、明治時代歐洲の思想が入つて來るまで殆ど變化が無かつたと云ふ記事（七頁）があつたが、予は嘗て日本人の自然觀のことを考へた時我國の自然美の見方には一の型が早くから定つてゐた、其の中の一因として古今集の和歌が後の時代に廣く讀まれ、其中にある自然の寫し方が其範をなして永く日本人を支配したと云ふ樣のことを考へたが、出達點の解釋に少し相異はあるが同じ考へ方が此の著述の上に見るを得て自分として愉快に感じた。

以上は一讀の際に於ける、本書の特色と價值に就て感じた諸點である。是れと共に違つた方面の感想も又茲に概言したく思ふのである。

五

凡そ國民思想の研究は、困難なる問題であると言ふまでもない。其困難は一は其方法の上から一

は又其材料の上から來る。其方法としては其對象たる國民思想を認識し行く手續の宜しきを得なければならず、材料としては出来るだけ多方面に、其資料の蒐集せられることを望まなければならぬ其研究成果の良否はよつて此にかゝるのであるが之れを研究者の側から言ふならば、多方面の資料を累積したる上に研究者の深い考慮を要せなければならぬ。博く通する理解力の上に透徹する思索の力を俟たなければならぬ、過去の時代の國民思想の研究は歴史家の職分だとは言へるが、單に普通の過去の事件に通曉すると云ふ人々によつて多く期待せらるべきでなく、思考力に於て特殊の能力ある人に依らなければならぬ。かやうな完全な意味は別として資料の關係上なり、其研究者の學問の素地から用ひ慣れた材料、訓練せられた觀察力によつて國民思想の研究を爲して行くことは甚だ望ましきものであり、又此問題の研究の進歩

の上に寄與することの大なるものであらう。然し其處には又夫れに對して議論が生じて來る。

一般に文學に現はれたる國民思想と云ふことは言ひ換ふれば、國民思想が、如何に文學の上に現はれてゐるか云ふことである。研究者から言へば文學を材料として研究したる國民思想と云ふことであつて、國民思想が元來文學にのみ表現せられるのでない以上、材料の上に制限があるのだから嚴密なことを言へば其から來る國民思想の研究の結論にも制限がある譯である。而して其罅を越へることは論理上許されない譯である。かやうな種類の研究問題が往々にして誤つて來るところは此の關係によるのである。本書「文學に現はれたる我が國民思想の研究」は其推斷と記述の間に多くの注意を拂つてあつて、此論理上の陥穽に足を入れないやうにしてゐるのは喜ばしい。本書各編の劈頭には各々の時期の文化の趨勢を記して、文

學以外の諸事相に亘つて著者の觀察を述べてゐるのは、本書の特色として先きに擧げたところであるが又、此の點の陥り易き缺點を極めて有効に補充してゐるのである。

然し著者は又さきにも掲げた如く、論斷の自由を喜び、議論の透徹を好み、又潑刺直截なる言辭は其筆の趨るところ、其羈扼を振り切つて、歸納的推理であるべきところが演繹的展開に變つてゐるところが少くないやうに見受ける。本書の序文に坪内博士が「氣任せなること。逆捻的の如く」と言はれてゐるのも此邊の意味合かとも考へられるのである。

四季や戀歌の多い三代集の題材から見て、公共的精神や國民國家社會に對する思想などが初めから無いと言ふ風に一氣に論斷しやうとする類は此の例である。(二五九頁)
(二六〇頁)

六

同様に本書讀過の際感ずることは、敘述の間、模倣たり易いが。吾人は其兩者の間に存する複雑其對象たる文學なり、其から見たる生活なりに對して稍々熟慮と同情とを缺いてゐないであらうかと思はれるのである。同情を缺くと言ふ意は、著者が文學の作品に對して其外形に目を注ぐことの急にして其裡に潜むものに對する、考察に於て親切が足りなかつたらうかと云ふ意味である。著者は、和歌に就て見ても、其技巧方面に餘り多く着目してゐるやうに見ゆる。著者は、和歌の作品に對して詩人的敏感を以て、時々之れに應酬してゐる、併し尙技巧論修辭論の爲めに、却つて其内容思想を逸散さしてゐるやうに見受けることが多い議論としては、外形を取扱つてゐるだけに明快であり、客觀的に其證徴を採るから、何人にも其議論の筋は通るのである。元來が印象的な短詩形の和歌であり。其内容論は讀む人々の主觀的價值によつて、多少の異同があるのだから議論としては

模倣たり易いが。吾人は其兩者の間に存する複雑な關係に對し、尙少し考慮を煩したく思つたのである。漢詩にても同様である。懷風藻の詩が知識本位、技巧本位にて情生活の表現として何等價值がないとした(五二頁)なども此例である。却つて著者が此時代の私生活の趣味發現を説く條に萬葉集の歌と共に、懷風藻の詩序を引用する如く(六一頁)其詩も亦萬葉と比較して、どれだけ日本の思想が入つて居るかを見るがよい。古今集を取扱ふにも、著者は技巧論から入つて、技巧主義的吟詠としたまではよいが、此一面から却つて内容の複雑多樣を否定せんとする傾がある。古今集和歌の主觀的、思惟的な方面に複雑な意味の存するを沒却せんとしてゐる。同様の傾向は本書の新古今集論にもあらはれてゐる。新古今集調の特色は全く技巧の點にありとして、俊成の幽玄牀と、其子定家を中心となつた新古今調とを同じく技巧の方面

から總括しやうとした（四九）（五頁）のも著者の態度が判る。結局著者は、古今時代から新古今時代に及んだ和歌の發達變遷を、根柢の思想は動かないで理智的なものから餘韻主義のものになつたのは纖細な技巧の力によつたとしてゐる。

吾人は此の言をなすのは、此處に文學の評論をするためではない。著者の、此の技巧方面に特に注意し、其内容の考察に稍々不親切であるとは、本書の主旨たる思想研究に於て割合重大な影響を與へるものでなからうかと考へるからである。

七

次に又本書には、佛教思想、支那思想が可成詳説せられてゐるが、人によつては著者と見解を異にするところが多いであらう。異國の趣味情調が我國民の夫れに融和し行く徑路に就ての著者の所論は、吾人の見るところでは、異國文學が我國文學に鎔融し行くことの説明は甚だ巧みであるが、

佛教や儒教に關するものについては、吾人と所見を異にすることが少くない。著者は外來思想に就て初めから凡て差別的に考へたため論理が明澄であるけれども、却つて事實を犠牲にしないであらうかと思ふ。

著者は佛教を以て異國思想として固有思想と常に區劃することが峻嚴で、各時代の兩思想の混淆を甚しく機械的に見過ぎた風がある。宗教信仰として本來的の傾向、普遍の現象が我國固有思想と此の外來信仰との間に如何に働いたかと云ふことを多く顧みなかつたやうに思はれる。元來が心靈上の現象であるのだから、其發生上の關係なり、其歴史を異にしてゐると云ふ事柄を超越して融合點を多く見出すことの易いものでなからうか。著者は儒教に就ても同じ態度である。儒教の道德上の用語は支那のものを採用したが、其等に該當する道德的意識は儒教以前から存在し得たものであ

らう。何處の國民にも、民族にも相當文化の發達したところには、共通な人間性と云ふ様のものゝ存在を考へることが出来るので、儒教が凡て支那の社會に發達したから社會狀態を異にしたところには全く行はれ難いものゝやうに解したのも尙ほ考慮を要するし、又それにしても社會狀態の相異についての著者の見解が不明瞭である。

佛教に關しても、著者の差別的に見て行く論理が大分禍をなしてゐるやうに思はれる。佛教渡來の初めに於ては、國民在來の信仰との間に衝突があつた、著者が、幼稚なアニミズムのところへ突然支那の思想が入り、また佛教が入り、外來思想の方が程度が高いものであるから知識として受入れるとが出来るが實際生活と融和しないと云ひ又祈禱佛教も、舊い昔ながらの幼稚な宗教に佛教の衣を着せたので木や石の代りに佛像を拜んだだけのことであるとしたのも、佛教渡來の始めに佛を蕃

神と記してゐることなどに思ひ合せて、此の考へが大体に於て然るべきことゝ信する、然し吾人は是から出發して此の事項は佛教が吾國民の思想に如何なる點に早く融合點を持つたかを窺ふべきものだと思つたい。是れより、漸次、儀式法會から佛教の思想が理解せられ國民思想の内に流れ込んだことを考へるので、又是れは極めて自然に進んだことと思ふ。儀式として行はれ、又詔勅などに早く出てゐる放生會の思想などは一寸文化の進んだ人間の社會には容易に了解せられることであるし生活の上などに影響の受け易いものである。かく論ずれば奈良朝などには佛教が餘程國民思想の上に浸染して來たと見なければならぬ。著者は萬葉に現はれた佛教の思想の影響が少ないからとて否定しやうとするけれども、著者が舉げた佛教的思想の、辭句の上に現はれてゐる數首を見ても十分である。一体に言語の雅馴を尊ぶ和歌には外來的な思

想の露はに出ることを阻めたこともあらうから、強ちに數の大小から直ちに論することは考慮を要するのであらう。(二一頁。四九頁。五一頁。參照)

平安朝の佛教と國民生活に關しても、著者は佛教々理を只論理上の遊戲とし敎理の變遷等を單なる流行の如く説き去らうとしたのは餘り淡泊である。(三六頁) 五性各別を説く南都の敎僧と一切皆成

佛を演べた北嶺の學侶の論議は一座の法筵を賑はすたゞ論理上の遊戲として見ることは出来ない。

理觀の佛教が事觀となり、或觀或稱の念佛が專修念佛に轉じ行くことが社會や時代思想と沒交渉

のやうに考へることが早斷に過ぎてゐる。同様に

源氏物語に「聲尊き人々經など讀ませて夜一夜あそび給ふ」とか枕草子に「經よみ歌うたひ」とあるからとて宗教を消閑遊玩具とするは早計である。

榮花物語の「御堂の有様、佛いとおかしげにて」のおかしげの語も左程遊戲的の意としがたい。當代

の法華經讀誦なども極めて輕い意味に觀てゐる。

此等物語類の内から道長時代宗教上の信仰を探らうとするならば、御堂關白記などをも一應顧みる要がある。さうでなくとも物語や日記の内からも敬虔な宗教信仰の材料を得ることは、さほど困難でない筈である。(三七六頁參照)

かやうに佛教の思想に關する方面の記述が尙著者の熟慮を煩はすべき所が多いでなからうかと思はれる。尙ほ著者の自然觀を論する條に於ても佛教の方面から來た自然觀の上の影響なども看過されてゐるやうである。

平安朝時代に於ける佛教と自然觀の關係は興味ある問題であらうと考へる。法華經の譬喩品や如來壽量品にある園林諸堂閣、七寶雜色樹などの語淨土敎興隆に伴ひ阿彌陀經などに説かれてゐる極樂の莊嚴等が眼前の自然を見る上に全く沒交渉だと云ひ得やうか。已に美術の上には其の影響もあ

るのであるから、文學の方面に於ても此等が當代人の自然觀に影響がなかつたとは言へないであらう。實際生活の上に於ても中右記などの公卿の日記に雲霧などの美を見て、佛天の靈應を想像したやうの記事があるのだから、謠ひ物の梁塵秘抄の内にも法華經等の佛典の翻案から來るのが多くある。彌陀の相好を秋月、青蓮、白雪に連想するところが金光明經四天王護國品、蓮華喻讚品の所説と關係あることは明白で、自然界を佛陀の所縁に求めたもの敢て少くないのである。

以上は同じく本書讀過に際し心に浮んだ望蜀の感である。固より是等は著者と吾人が見解を異にしたと云ふに過ぎないものであつて、著者の此の多大の勞作に對して菲議を夾むの意味ではない。従つて本書の特色と價值に於て多く係るところではなからうと思ふ。

要するに本書は論斷の爽新と理路の整然たるに於て勝れ、特色ある觀察を以て從來と餘程異つた形式の下に、上代文學の形貌を捉へ、國民思想の推移を闡明せんとしたもので、著者の此點に於ける功績の甚だ大なるものがある、吾人に見解の異つたところもあるが、上述諸種の特色長所は何人も是れを認むべきもので國文學の研究者、或は文化史研究に興味を有する人々に對して幾多の問題を提供してゐるのである。吾人は續刊せらるべき武家文學時代、平民文學と相俟ちて、著者によりて國民思想推移の研究が我學界に初めて提出せられることを喜び、其の變遷推移が著者獨有の論斷の下に如何に歸結せらるゝかを見ることを樂しく待つものである。たゞ本文中著者の意の存するところを誤り、字句の禮に嫻はざるものあらば、幸に著者の御寛恕を希ふところである。